

平成２７年度広島市スポーツ推進審議会第１回広島市スポーツ振興計画見直し検討部会 会議録

I 開催日時

平成２７年７月３１日（金） １５時３０分～１７時００分

II 開催場所

広島市役所本庁舎１４階 第１会議室

III 出席者

１ 委員 ８名中７名出席

東川会長、小笠委員、梶原委員、小林委員、鍋島委員、西野委員、山下委員
（欠席：崎田委員）

２ 事務局

文化スポーツ部長、スポーツ振興課長、教育委員会学校教育部指導第一課長、
健康福祉局障害福祉部障害福祉課長

３ その他

公益財団法人広島市スポーツ協会事務局

IV 会議次第

１ 開会

２ 部会長の選出

３ 議事

「広島市スポーツ振興計画」の見直しについて

４ 閉会

V 公開・非公開の別

公開

VI 傍聴者

無し

VII 会議資料

平成２７年度広島市スポーツ推進審議会第１回広島市スポーツ振興計画見直し検討部会 次第
平成２７年度広島市スポーツ推進審議会第１回広島市スポーツ振興計画見直し検討部会名簿
平成２７年度広島市スポーツ推進審議会第１回広島市スポーツ振興計画見直し検討部会配席図
議事関係

議事資料１：広島市スポーツ振興計画見直しの視点等について

議事資料２：「広島県スポーツ推進計画」と「広島市スポーツ振興計画」の比較表

参考資料１：広島市スポーツ振興計画の見直しに係るスポーツ推進審議会委員の意見等

参考資料２：広島市スポーツ振興計画における推進施策に係る成果及び課題（事務局案）

参考資料３：数値目標の進捗状況

参考資料４：スポーツ振興計画に係る推進施策の実績（主な取組）

Ⅷ 会議・発言の要旨

1 開会

2 会長及び副会長の選出

〔スポーツ振興課課長補佐〕

部会の開催に伴い、部会長の選出を行う。

本部会の部会長は、広島市スポーツ推進審議会運営要領第2条第3項において、委員の互選によって定めることとなっている。

御推薦、御意見等があればお願いしたい。

〔梶原委員〕

前回の計画策定時において、審議会の会長が部会長となっている。

従って、部会長は、東川会長に就任いただくのはどうか。

〔全委員〕

異議なし。（拍手）

〔スポーツ振興課課長補佐〕

異議なしとのことでしたので、部会長は東川会長にお願いしたいと思うが、東川会長いかがでしょうか。

〔東川会長〕

了解。

〔スポーツ振興課課長補佐〕

それでは、東川部会長に、一言御挨拶を頂きたい。

〔東川部会長〕

部会長の御指名がありましたので、務めさせていただく。当初、27日の予定だったが、学生指導の関係で参加できなくなり、延期となつてしまい申し訳なかった。見直しということで、前回、諮問があった。少しメンバーを絞った形で、まずはたたき台を作ろうということで、今日お集まりいただいた。すでに頂いているものもあるが、忌憚のない御意見を頂きながら、次の5年間がより見えるような、あるいは、目標が持てるような計画の見直しとしたい。

3 議事

「広島市スポーツ振興計画」の見直しについて

〔東川部会長〕

それでは、議事に移らせていただく。

「広島市スポーツ振興計画」の見直しについて、事務局から事前に資料を配布させていただいているが、検討部会では、審議会で示した計画策定後4年間の成果と課題踏まえて、数値目標及び各施策のどの部分をどう見直すかということについて具体的に御審議いただいて、次の検討部会でこれを基にした素案を作成するという流れでいきたい。

私は廿日市市の振興計画にも携わったが、ちょうど広島アジア大会が始まる頃に廿日市は計画策定したが、10年経った後どうするかということで会議があり、新たな振興計画を作成した。その時の内容は、計画を出して、10年間でどうなったのか、という振り返りをした。振り返りをした上で、今後10年ないし15年をどうしていくかということをしていかないと、絵に描いた餅を次から次へと出していくだけになり、実質的なものにならないのではないかと話をした。本日は、事務局からこのあたりを踏まえた形での説明をしていただくようお願いしている。

まず、最初に事務局から見直しの視点を含めて説明していただき、その後、振興計画の大きな柱となっている数値目標についても、皆さんに御意見いただきたい。その次に、各数値目標を踏まえての各施策が示されているので、それぞれの施策について御審議いただき、最後に、形式的にはなるが、法律の改正等に伴い名称が変わったもの等の文言整理について御諮りする。それでは、事務局から見直しの視点等について説明をお願いします。

〔スポーツ振興課長〕

（議事資料1及び議事資料2説明）

〔東川部会長〕

それぞれの事業の進捗状況等について、審議を進めていきたい。

まず、数値目標の内容及び施策について一つずつ確認していく。鍋島委員の「数値目標1を65%から70%に」という御意見や事務局の考えなどが示されているが、参考資料3の過去の実績も御覧いただきながら、御発言いただきたい。

〔鍋島委員〕

事務局の説明でよく理解はしている。ただ、ここに書いたのは、東京オリンピック・パラリンピック後のためだと思う。東京都が平成25年に、2020年には、65%ではなく70%を出した。平成25年度に出す5年前と比べると、39%から50数%に増えたので、その流れから、東京は70%と設定した。東京が70%を引き出したのは、スポーツに触れて、楽しめる環境を創出しようというのが一つであるし、東京もスポーツをしたくなる街を柱に掲げたということ、そして、我々も掲げているが、ライフステージに応じたスポーツ活動を推進していく、ということをしており、東京都が出している数値が無理をしているという感じがしなかった。そういう面では、広島は平和都市であり、オリンピックも平和のためにあるわけで、我々が冠をつけた、新しい「スポーツ王国広島」という形になると、オリンピックをやる東京と同じように、広島も70%位を目標とし、それに到達する努力が必要かと思う。全国的には65%で概ね足並みが揃っているのではないかと思うが、その中で広島はスポーツ王国と

ということで、他都市とは少し違うのではないかという思いがあり、数値が届かない感じはしていたのだが、そういう気持ちで書かせていただいた。無理を言うつもりはない。

〔梶原委員〕

ここは、計画への表現の仕方なのかなと思う。週1回以上スポーツをする市民の割合が3人に2人以上という表現でカッコが65%となっている。割り算すると66.7%なので、5%刻みということで65%なのだと思う。鍋島委員のおっしゃるように、見直しをする前に、10年後を65%にしていって、その途中経過で51%まできたので、事務局とすれば、5%程度の違いであれば、51%でまだ届いてないので、据え置きで良いのではないかということだと思う。国が新基本計画を作っており、その基となるデータが、当時、45%の週1回の実施率を踏まえて65%、やはり3人に2人としている。広島市は既に51%に達しており、国より5%程度上回っているので、ここから5年後、国も5年後なので、国より5%高い70%でも良いと思う。

〔東川部会長〕

国も、スポーツ立国戦略の段階では60%としていた。その後、スポーツ基本計画において65%とした。私が気になるのは、世代間でどうなのかということである。若い世代と高齢者が頑張って上がってきている気がする。その効果で全体が平均すると吊り上がってきているように見える。中間世代のところで、御意見もいただいているが、30代、40代のところが伸び悩んでおり、平均して3人に2人すると、施策の展開としては大雑把になるように思う。世代別の目標設定もできないかと思う。世代別の実態は把握しているのか。

〔スポーツ振興課長〕

平成26年度の調査では、10代が60.7%、20代が42.4%、30代が40.7%、40代が38.6%、50代が46.0%、60代が60.5%、70代が64.7%、男女別では、男性が54.7%、女性が46.0%となっている。やはり30代、40代が状況としては、数値が悪い。

〔山下委員〕

年をとると、高齢化時代を迎える中で、高齢者になると自分の健康管理を気にするので、こういった数値になるのだと思う。高齢化により少しは上がってくると思うが、逆に、若年層が果たしてしっかりスポーツに取り組むような社会環境にあるのかということ、疑問である。70%の目標は良いとは思いますが、実際問題、今70%に達している年齢層がない。最大で70代の64.7%である。これが、80歳90歳になると、恐らくほとんどいないと思う。すると数値は下がってくると思う。それを踏まえると現行で問題ないと思う。

〔東川部会長〕

U字型であり、国でも同じ傾向である。後で中間世代のことも話題として挙がってくるので、数値目標は65%のままで良いと思うが、平均して、高い層がいるから何とか持っているという感じがある。厚生労働省が出している健康寿命の結果は、広島県は下から数えた方が早い。特に女性の健康寿命は下から2番目となっている。男性が30位である。元気に、支障なく生活できる年齢が全国に比べると低い。早くから介護が必要な状況になっている。それを考えると、60代が60.5%、70代が64.7%だが、その前の若い世代をサポートするような

ことを考えなければならない。そうしないと、山下委員のおっしゃられたとおり、今後下がっていくことが考えられる。例えば、70%を掲げたとしても、年代別の目標を設定できないかと思う。

〔山下委員〕

若い時にスポーツに馴染んでないと、年をとってもスポーツに馴染むという動機付けが難しいのではないかと。一番少ないのが40代で38.6%であることを踏まえると、全体的に高齢化が進む中で、それが増えるかといわれると増えないと思う。実際、後5年のうちに50代になったとしても、46.0%、10%増えても48.6%なので、あまり増えるような話ではないと思う。また、こういう施策が、振興計画の中で数字を見せて市民の皆さん頑張らましようという啓発活動をしっかりやらない限り難しい。今、市民の皆さんがこういう計画があることをどれだけの人を知っているのか、知っている人はほとんどいないと思う。平成23年の計画策定時に市の広報紙で一度大きく掲載された後、平成26年に掲載された程度である。何年かに一回の広報で、市民が関心をどれだけ持っているかということがそもそもの出発になる。これは全ての施策に共通することである。

〔東川部会長〕

西野委員はいかがか。

〔西野委員〕

今、30代40代でスポーツをする人が少ない。恐らく子育て世代であるためだと考えられる。子育て世代になると、自分達の周りを見ても、子どものスポーツ行事にはついていくが、自分がスポーツをする時間は実際とれない。例えば、小学生の野球チームに土日に保護者がついていく。中学校でも部活動で保護者が手伝っているところもある。実際のところ、保護者の方は、自分自身がスポーツをやるのではなく、スポーツに携わっている方が多い世代ではないかと思う。そして、50代60代になって子どもが手を離れたときには、今度は自分の番だということで、自分がスポーツをできる環境にあるのではないかと思う。そうなった時に、例えば、地域でされているママさんバレーなんかの世代は幅が広いが、どうしても活動しやすい年齢の方が参加されていると感じる。30代40代の数字を単純に上げようとした時に、子どもと一緒に活動できる場所作り、作戦作りというか、世代をまたいで一緒に何かできるものがあれば良いかと思う。30代40代の数字を上げることだけ考えれば、そういうものが必要かと思う。

〔東川部会長〕

小笠委員、いかがか。

〔小笠委員〕

70%とするのは、非常に高い目標だと思うが、目標は高い方が良いと思うので、異論を挟むものではない。しかし、目標を設定するには、ある程度裏づけになるものが必要ではないか。70%という説明がつくものが必要である。ただ、それが何なのかがすぐには思いつかないが、数字的には高い方が良いかと思う。東京が70%だから広島も70%ということではなく、何らかの従来の目標にプラス5%とする要因が欲しい。西野委員の言われたように、まずは若い世代の間、10代、学齢期、高校、大学の上にスポーツに親しむ経験、動機付けをしておく。

当然、20代、30代となると仕事も忙しくなり、どうしても減ってくるだろうから、それは仕方のないことだ。それが、いつでもスポーツに復帰できるという環境づくりは早いうちにしておく必要があるだろうし、西野委員の言われたとおり、私は、まさに今子育てが終わったところだが、子ども達がスポーツをしているとき、毎週土日に妻か私が車を運転して送り迎えしていた。ただ、良い例もあって、子ども達がサッカーをやっているのを見ていたら、俺達もやろうかというということも、少し出てくる。でも、サッカーはしんどいが、フットサルなら、ということで、お父さんのフットサルチームができてきている。お母さんの中にも、子どものバスケットボールを見ていたら、バスケットチームがあまりないから代わりに何かやろうというサークルができてきているという話を聞く。あるいは、赤ちゃんを育てているお母さんの中で、最近ではベビーカーを押しながらランニングが出来るというものも出てきている。そういった、スポーツをしたいという潜在的な要素はかなりあると思うので、これをどうやって活かしていくかということだと思う。このあたりの環境整備ができれば、20代、30代、40代での、U字の角度は少しでも減るかと思う。70%という数字は魅力的な数字だが、何か裏付けがひとつ欲しい。

〔東川部会長〕

スポーツ少年団の講習会に行くことがあるが、指導者の方に必ず言うことがある。小笠委員からあったように、お父さんお母さんが送ってきて子ども達のスポーツをしている姿を見てるので、その人たちをそのままにしておく手はないだろうと。その人たちにも何かスポーツをするような企画を考えてあげて、子ども達はこっちでサッカーをしている、お父さんお母さんはこっちで何かやっている、というものがあれば、それがまさしく総合型地域スポーツクラブになるでしょうという話をする。そのような形で動けば、少しずつ変わっていく要素になる。小林委員、いかがか。

〔小林委員〕

私はどちらが良いという思いはなく、目標が高い方が良いとは思いますが、現実には20代から50代は仕事の関係等があり、50%に達していない状況である。先ほど梶原委員の言われた3人に2人というのは、人数的に言うと分かりやすい数字である。10人に7人というよりは、3人に2人はスポーツに親しむようにしていこうということで、65%ということだと思う。ニュースポーツの普及というのがあるが、30代40代のお父さんお母さんがされているPTAのスポーツでも、今までずっとソフトバレーボール等があったが、今年から私のいる区では、フラバールボールバレーという新たなスポーツが入ってきて、それをやっていこうということで、区の大会で実施する。これは、今までバレーボールを経験していない人でも出来るスポーツだそう。こういうものを普及することで、スポーツに親しむ方々も増えていけば、数値も上がるかと思う。

〔梶原委員〕

65%から70%に上げるにあたり、何か要素があるのかということについては、5年後に東京オリンピック・パラリンピックがありますし、それに向けてのスポーツ熱が全体で高まると思うので、期待を込めて70%ということではいかがか。ただ、皆さんの意見も一致している訳ではないので、他の数値目標も踏まえた上で、検討していけばよいと思う。

〔東川部会長〕

それぞれが強いこだわりがあるとはいえない状況だが、目標はしっかり持てる形にした方がよいというのが共通認識であるようなので、中身をしっかり考えて、施策に展開させて、守りに入らないようにしたい。

続いて、新体力テストの結果において広島市の平均値が全国の値以上となる種目の割合を50%以上にします、ということで、これについては、年度によってばらつきがあるが、おおそクリアしている。事務局から提出された見直し案では、新たな数値目標を示した方がよいという提案がされている。小林委員、いかがか。

〔小林委員〕

年度によってすごく差がある。サンプル数が非常に少ないためにこれだけの差が出てくる。一概に超えたから上げるというのもどうかという思いがある。

〔山下委員〕

中学生は、3年後には皆高校生になる。これを見ると、26年度の46.3%は、何かない限りはよく頑張って50%いくかいかないかであろう。場合によっては横滑りになる。50%達成しているが、サンプル数の関係もあるだろう。全体平均は加重平均なのか。

〔指導第一課長〕

それぞれで全体での平均である。

〔東川部会長〕

年度によって数値に波があるのが悩ましいところである。

〔指導第一課長〕

高等学校がずっと良いのは、市立高校が8校で、小中学校は全市の子ども達となる。高等学校になると、全児童に対しての高等学校8校と、随分少ない子ども達になるので、値としては良くなる傾向がある。小中学校で、年度により上がったり下がったりするのは、どの学年、どの年度も50%に届くという最低目標ラインとして設定することが必要かと思う。

〔山下委員〕

同じ人を、同じ学校をずっと対象にあげれば、ある程度安定するのではないか。

〔指導第一課長〕

この数値は、本市は全学校を調査している。全国が抽出調査となっており、本市は全数調査である。全国は非常に少ない抽出割合となっている。全国の値が大きく変動するため、数値に影響を受けるが、本市の場合は大きな変動はない。

〔山下委員〕

高校はフラットな感じだが、小学校の波が激しい。

〔東川部会長〕

数値目標については、指導第一課長のおっしゃるように、安定して50%以上ということで

いかがか。ただ、波が読めないところがあるので、高校のように安定させることが、今後の目標となるように思う。

〔山下委員〕

数値を変えずに文言の整理ということも一つかと思う。50%は維持して、平均的に今後5年間は50%以上を目標とするなど、文言の整理の方が良いと思う。

〔東川部会長〕

小林委員、どうして小学校はこのように波がでるのか。

〔小林委員〕

今言われたように、全国は少ないサンプル数の調査であるが、広島市は全数調査している。広島市の推移は大きく上下していない。その状況の中で、全国平均が大きく上下するので、その影響を受けている。山下委員が言われたように、平均値は維持しながら、市内の平均は上げていくという気持ちを持つことは大事かと思う。

〔鍋島委員〕

なぜ全国の平均値を目標とされたのか。広島市が全数調査しているのなら、新体力テストの種目がどうかよく分からないが、目標として立てやすい。

〔東川部会長〕

この数値の立て方は、全国とほぼ同じである。全国の体力テストの結果を比較して、必ず全国平均と比べて何種目上回るとしている。例えば、県内の小学校でも、県内の平均と比べて、うちの小学校はこの種目がちょっと低いといった見方をするのが、一般的である。もしかすると、全国平均の何%というのを削除してもよいかもしれない。全国平均の影響をあまりにも受けすぎているので、良い結果がもしかすると広島市では出ているにも関わらず、全国平均の影響を受けて上下しているとすれば、元を切ってしまった方がよいかもしれない。具体的にどう示すかという代案を考えなければいけない。

〔梶原委員〕

県が策定した計画、こちらの方が最近できた計画であるが、これでは、小学校5年生と中学校2年生の体力合計点の全国1位を目指す、と目標設定しているが、体力合計点というのは絶対評価なのか。

〔指導第一課長〕

それぞれの種目、握力や50m走等について、1点から10点まで得点化して、8種目あるので、80点満点となっている。

〔梶原委員〕

それが、少しずつ伸びるという傾向があれば、広島市の子ども達、小学校5年生や中学校2年生は、体力、運動能力が高まっていると言える。平均値の50%を超えるという目標では、平均値そのものに不規則性があるので、本当に体力が向上しているか分からない。県が発表した新しい計画が、数値のポイントで伸びているかどうかははっきり客観的に見えるのであれば、

そのような数値で目標を立てた方が良い。相対的な比較だと、本当の意味で体力がついたのかどうかははっきりしない。

〔東川部会長〕

見た目には全国より上回っているということで、見た目は良いが、私もこの4年間でこのようなデータが出てくるとは予想もしていなかった。梶原委員のおっしゃられたように、検討する必要があると思う。

〔梶原委員〕

変えた方が良くと思う。平均値に左右されすぎている。

〔東川部会長〕

根拠さえしっかり示すことができれば、数値目標については、こういう風に変えたと示すことができる。これは宿題とさせていただきたい。

次に、競技力向上について、国民体育大会に出場する広島県選手に占める広島市選手の割合を50%以上にしますということについて審議する。

〔スポーツ振興課長〕

補足説明をさせていただきたい。ふるさと選手についてだが、実態として、ふるさと選手を入れてカウントした方が良くというのが事務局の思いである。ふるさと選手を入れて計算すると、平成26年度は59.1%、平成25年度は57.0%、平成24年度は58.8%、平成23年度は48.1%という状況である。これらを踏まえて御審議いただきたい。ふるさと選手は、広島県内の中学校又は高等学校を卒業した者である。居住地とするよりは、これらを含めてはどうかという思いである。

〔東川部会長〕

小笠委員、いかがか。

〔小笠委員〕

ふるさと選手を含めると数字が跳ね上がるので、当然、目標も修正することになると思う。これまでの話の中でもあったように、目標は高い方が良く。カウントの仕方の中で質問だが、最終卒業校のカウントとなるのか。

〔スポーツ振興課長〕

卒業した中学校か高等学校により取り扱われる。

〔小笠委員〕

学校所在地で考えるということか。その子が広島市民でなくてもカウントされるということか。広島市の学校を卒業しているから、カウントされるということか。例えば、沼田高校や皆実高校でもスポーツ強いところの子どもは市外からたくさん来ているが、彼らは皆実高校卒業なので、ふるさと選手となるということか。

〔スポーツ振興課長〕

その通りである。

〔小笠委員〕

それであれば、相当数値も伸びるだろう。市外在住の子どもも相当いるはずだ。

〔東川部会長〕

国体の制度も変わり、広島の中学校又は高等学校を卒業した大学生が、県外へ出ても全てふるさと選手となる。そういったこともあるので、今回、ふるさと選手をカウントしてはどうかということである。

私は、ある意味では、帰ってこられる器、条件というか、そういうものを作るということにつながっていくので、ふるさと選手をカウントしても良いと思う。

〔山下委員〕

計画策定時は、ふるさと選手をカウントしていなかったということか。

〔スポーツ振興課長〕

その通りである。広島市在住選手のみである。

〔山下委員〕

それであれば、ふるさと選手をカウントして、目標をこれだけにするという形にすればよい。

〔スポーツ振興課長〕

山縣選手は、セイコーへ行っているが、彼が帰ってくれば広島市選手となる。

〔東川部会長〕

県外へ出ていっても、広島市出身の選手については、しっかりと応援しますという意味合いになる。具体的な数値は、実績として約60％程度になっているが、70％位となるのか。

〔文化スポーツ部長〕

県内の中学校や高等学校は、広島市内に多くがあるので、高くするということで良いと思う。

〔東川部会長〕

それでは、この項目については、70％を目標とする。

〔小笠委員〕

再度確認させていただくが、広島市内の高校に通っていた廿日市市の子が、東京の大学に行って帰ってくる場合は、カウントされるのか。

〔スポーツ振興課長〕

学校によるので、カウントされる。

〔東川部会長〕

こういう、ふるさと選手を含めて競技力向上に努めるということになると、それに見合った内容を考えなくてはならない。広島市はふるさと選手もしっかりとフォローしますというメッセージを出すことになるので、具体的にどんなことが出来るかということを考える必要がある。

続いて、トップス広島に加盟するチームの試合を年1回以上会場で観戦した市民の割合を50%以上にしますという項目について、今は少しずつ上がりながら、40%を少し切る程度だが、目標は50%である。

〔鍋島委員〕

今は、カープとサンフレッチェだけで相当上がってきているのではないか。

〔西野委員〕

平成27年度をもし比較したら結構な数字になるのではないか。

〔東川部会長〕

10%程度差があるので、どうするか。

〔山下委員〕

リピーターはどのように取り扱っているのか。

〔東川部会長〕

リピーターの方が多いだろう。

〔鍋島委員〕

今はどう計算されているのか。入場者は広島市民とは限らない。

〔スポーツ振興課長〕

市民アンケートを基にしている。男女別では、男性が48.3%、女性が34.3%である。年代別では、10代が46.4%、20代が53.3%、30代が47.5%、40代が49.4%、50代が43.1%、60代が32.9%、70歳以上が27.4%となっている。

〔山下委員〕

リピーターが何度行っても1人は1人と考えているのか。

〔スポーツ振興課長〕

その通りである。

〔東川部会長〕

世代で安定している。

〔小笠委員〕

先ほどのスポーツをやるというのは対照的な結果だ。見る方は若い人が多い。50代以降に見に行く人は、なぜ減少傾向にあるのか。今の60代70代は元気な人が多い。

〔山下委員〕

サラリーマンの方は仕事帰りに見にいかれることが多い。70代になると、わざわざ遠くまで見に行こうということが無くなる。

〔小笠委員〕

会場で抽出アンケートをとっているのか。

〔スポーツ振興課長〕

市民アンケートである。

〔東川部会長〕

見るよりも自分の健康の方が気になるという結果だろう。

〔小笠委員〕

スポーツはテレビで見るものだという方が多いのかもしれない。

〔梶原委員〕

カーブだけで年間200万人としても、結局は同じ人がたくさん行くということで5割に達しないということなのだろう。

〔山下委員〕

三次や呉といった市外の方が多いのではないか。

〔東川部会長〕

JRの混雑からすると、そうだと思う。

〔小笠委員〕

値段が高いといったこともあるのではないか。カーブもサンフレッチェもお金がかかる。

〔梶原委員〕

年金生活で1回1万円程度となると、ちょっと苦しいのかもしれない。

〔東川部会長〕

年金パスみたいなのがあれば、また変わるかもしれない。

〔小笠委員〕

そうすると、ますますチケットがとりづらくなるだろう。

〔東川部会長〕

50%という目標はいかがか。今のカーブとサンフレッチェの盛り上がりを考えるともう少し上げて良い気はするが、10%開きがあるというところが引つかかる。

〔小笠委員〕

これを50%以上に上げるのは厳しいと思う。

〔東川部会長〕

これは据え置きにすることとしたいがいかがか。

〔全委員〕

異議なし。

〔東川部会長〕

時間が押し迫ってきたが、どうするか。中身と数値目標がどうしても関連してくるので、数字だけ検討するわけにはいかない。中身をどうするかということで変わってくるので、どうしても時間がかかる。これで更に具体的な中身となると、今から更に2時間はかかる。

〔文化スポーツ部長〕

数値目標に対する色々な御意見を頂いたところだが、数値目標を達成するために新たな施策というか、そういったものを考えなければいけない。今回の御意見を参考に、たたき台みたいなものを少し事務局で検討し、フィードバックさせていただいて、御意見を頂くということとしたい。集まっていただく機会もなかなか持てないと思う。

〔スポーツ振興課長〕

もう一つ、是非変えないといけないということがあれば、この場で御発言いただければ、そこを反映させながら作成していきたい。

〔東川部会長〕

もし可能なら、もう一度集まってこの続きをできればと思う。大変お忙しいのは重々理解しているが、委員の皆様いかがか。

〔梶原委員〕

開催するならあまり先でない方がよい。アイディア等が沸いてきたところなので、来週あたりがよいかと思う。

〔東川部会長〕

来週の御予定は皆さんいかがか。梶原委員のおっしゃるとおりだと思う。事務局は8月6日の式典のこともあり大変だろうが、8月5日の同じ時間でどうか。

〔全委員〕

問題ない。

〔東川部会長〕

では、8月5日に次回検討部会を開催することとする。

〔山下委員〕

一つだけ確認したい。広島市スポーツ振興計画の中の、計画の位置づけについて、この計画はスポーツ振興法となっているが、法律が変わっているので、計画の名称をスポーツ推進計画にする等、文言を変える必要があると思うがどうか。

〔スポーツ振興課長〕

スポーツ基本法の中で、スポーツ振興法に基づき作成された計画は、スポーツ基本法によるものとみなすという条文がある。そのあたりを、上手く表記をしたいと考えている。計画策定時はスポーツ振興法だが、その規定により、スポーツ基本法に基づいた計画であると言えるので、上手く表記したいと考えている。

〔東川部会長〕

このあたりの文言の整理、修正も含めて次回提案させていただく。

平成23年に策定する際も、骨格が定まるまでに4、5回は開催したかと記憶している。新しいスポーツ王国広島とは、何を持ってスポーツ王国と言うのが定まらなないと、具体的な内容も数値目標も決まらないということで、特にそのあたりを決めるのに時間を要した。そういう意味では、委員の皆さんには御迷惑をおかけするが、5年後の見直しということで、重要なことを検討しているので、5日に再度お集まりいただいて、本日の続きを進めていきたい。

もう一度本日の内容について振り返ると、数値目標も若干の見直しが必要だろうという御意見があったので、それを変えていったときにどういう内容を盛りこまなくてはいけないのか、あるいは、変えないけれども、数値目標に近づくためには、更にどういうことが必要か、ということを含めてそれぞれ皆さんの宿題として持ち帰っていただき、次回に検討していきたい。

それでは、引き続き御協力よろしく願いいたします。本日はありがとうございました。

4 閉会